

## デジタル・アーカイブの統合による地域メディア研究の再構築

### ーコミュニケーション・デザインとしての地域映像・アーカイブー

新潟大学人文学部 原田健一

#### 1. 目的

欧米では映像をデジタル化し、文化資源として共有化し、研究、あるいは教育的利用をすることが進められているが、日本社会では大幅に遅れている。こうした状況を、拡大している一因として、中央と地方とのヒエラルキーがある。映像情報（コンテンツ）は中央（ナショナルなもの）に集中化され、映像における地域性（ローカルなもの）は忘却されている。写された映像の地域性は、映像のもつヴァナキュラーな固有性を本質とし、基本的には写す人と写される対象との関係性を含んでいるのだが、写された映像を見る過程において一般化され濾過されたものだけが残るか、あるいは、隠されることで忘却される。デジタル映像アーカイブの研究においても、こうした傾向・あり方は変わらない。この研究では、こうした問題も含め、地域メディアのあり方そのものを再構築するものとして、地域映像アーカイブをコミュニケーション・デザインする。

#### 2. 方法

2009年以來、新潟という地域性をもうけることで、日常生活に堆積する映像を発掘し、調査をするアーカイブの手法を採り続けている「にいがた 地域映像アーカイブ」の実践的な研究の蓄積をもとに、発掘された映像資料の様態から、理論的になにが推定できるかを考察し、さらに再構築する。

#### 3. 結果

既に、地域の日常生活のなかで写されている、幕末から現在までの映像の多くが、マスとパーソナルなコミュニケーションの間、中間的コミュニケーションの領域にあることを明らかにしている(原田,2015)。また、受け手から送り手になっているアクティブ・オーディエンスというべき人びとの位置づけについて、映像の普及が大衆化するまで社会的に裕福な層を中心とし、地域集団、コミュニティがもっていた価値観や意識、感情などを発信していたことも分析し明らかにしている(原田,2013)。

これらの地域の映像資料を概観すると一つのかたまりとして、地域のあちらこちらに、時間的、空間的に点在している。こうした資料のあり方は、新聞、放送などの事業体としてのメディアの恒常性に対し、必要な時にだけしか表れない自生的なメディアとして間歇性がある。オルタナティブ・メディアといったとき社会運動的なもの、市民メディアという文脈が連想されるが、それとは全く違った土着的なコミュニティによって生み出されるオルタナティブなメディアの流れが断続的に、しかし継続してある。地域メディアはこうしたいくつかのレイヤーが重なるように積み上がっている。コミュニケーション・デザインとして地域でデジタル・アーカイブを構想するとき、こうしたいくつかの異なった(メディアを含む)レイヤーをどう集合させ、デジタル上で再現、再構成するかが課題となる。

#### 4. 結論

新潟大学の地域映像アーカイブのデータベースと県立図書館の新聞のデータベースとの統合という全国でも初めての試みを実践的に行った。問題は技術やシステムの問題とは異なり、①国立大学と県立図書館という別組織が行うための制度上の問題であり、契約の必要性であり、②映像と文字という異なるメディア資料を統合し共通した検索をどうするかという内容分析の方法問題であり、③ナショナルな国会図書館の公開基準に準拠すべきか、あるいはローカル・ルールをどの範囲で設定できるか慣習法上の問題など、中央と地方とのヒエラルキーを含んだ複相的な問題が浮上する。

#### 文献

原田健一,2015,「映像アーカイブによる中間的コミュニケーションの分析」『人文科学研究』136 輯

原田健一他編, 2013,『懐かしさは未来とともにやってくるー地域映像アーカイブの理論と実際』学文社